

第十七章 文の成分の省略

前にも申しました如く、文の主語・述語、及び述語の敘述を完うするために補充致しまする補語・客語等は文を構成するに必要な成分であります。場合に依りましては、相手の印象を深くするために、思想の重要な部分のみを存して他を省略することがあります。是から各成分に就いて其の省略の行はれる場合を調べて見ませう。

主語の省略

(一) 文の成分の中で最も普通に省略されますのは主語であります。主語の省略される主な場合を擧げて見ますと、

1. 話手(自稱又は第一人称)自らを表す場合。

四月十五日(ワレ)始めて杜鵑の鳴くを聞く。(ワレハ)請ふ諸君ノ此の擧を賛助せられむことを。

(私ハ)ゆふべ不思議な夢を見ました。(私ハ)今朝アサ五時に起きました。

2. 相手(對稱又は第二人称)を表す場合。命令・禁止の文に於きましては殊に多く省略致します。

(君ハ)何時頃御在宅に候ぞ。^{アル}主人なしとて(汝春を忘るな。

(アナタハ)何を見て入らつしやる。^ル太郎や(オマヘ)庭をお掃き。

3. 一般の人又は特定のを表す場合。

(人々)出品に手を觸るべからず。^ル名古屋は(世人)又中京ともいふ。^ル

支店は(本會社)之を全國樞要の地に置く。

(誰デモ)此處^コに落書するな。^ル會員は(本會ハ)特別會員と普通會員との二つに分ける。

4. 上の文(節)と共通の場合。

熊谷は西の城戸口濱際に控へて……相待ちける。(熊谷)後の方に馬の足音・人影のするやう覺えければ、雲透に之を見るに、武者二騎走せ來れり。(熊谷(二騎ノ)近づくを見れば平山なり。

鯉はまことに威勢の善い魚です。(鯉ハ)蟲などが水の上を飛んで居ると、撥ね上つて捕つて食ひます。(鯉ハ)時には二三尺も高く飛ぶことがあります。

(二)次に述語の省略されますのは上又は下の文(節)と共通の場合其の他

容易に推察の出来る場合に行はれるのであります。

二日目は事も無く過ぎ去れり。又三日目も四日目も事も無く過ぎ去れり。北部は麥を産し南部は茶を産す。鶯の宿はイヅコニアルカ」と問はばいかゞ答へむ。

僕は行かう。君は行クカ。兄は大阪で生れ、妹は東京で生れた。さあ君こちらへ來給へ。

述語が體言と指定の助動詞とて出來たものであるときには、助動詞を省略する事があります。而も口語の形容動詞又は指定の助動詞に準ずべきものは「て」を残して其の下に來る「ございます」等を省略することもあります。

人の心はこれぞ世の常ナル。

昔は昔ダ、今は今ダ。毎度お勿々でゴザイマス。これは見事なお看でゴザイマス。

(三) 次に補語・客語の省略されるのは、

1. 話手(自稱又は第一人称)を表す場合。

願はくは補ワレニ幸を下したまへ。妻も客ワレヲ待たむ子も客ワレヲ

待たむ。

善い工夫があつたら(君^補僕^ニ)ソレヲ教へてくれ給へ。(アナタ)入らつしやるなら(私ヲ^客誘つて下さい)。

2. 相手^(對稱 第二人稱)を表すとき。

秘傳あり(ワレ^補汝^ニ)ソレヲ教授せむ。必ず重く(汝ヲ^客賞せむ)。
これを(君^ニ)遣らう。町外れて(君ヲ^客)待たう。

3. 特定のもをを表すとき。

租税は(人々)期日までに(役所^補)納むべし。
犯人は直に(警官^補)捕縛された。

4. 上の文(節)と共通の場合又は上の文で推察し得る場合。

中納言も法師^〇になり給ひぬ。惟成の辨も法師^補ニなり給ひぬ。信頼馬に乗りかねたまふ所を侍二人つと寄つて(信頼ヲ^客馬^補ニ)押上げたり。

凡そ五十餘人の兵が楠木に助けられて(楠木^補ニ)川から引き上げられた。酒があるなら(僕ガ^客ソレヲ)飲まう。

∨形容的修飾語は下の體言を形容するものでありますけれども、其の體言が前に出て居るか、又は後に出てこれを繰返さなくても容易に推測するところが出来るときには、之を省略するのであります。

前の守も今の(守)ももろともに下りて、今のあるじも前の(アルジ)も手とりかはして……」。此の歌或人の曰く人麿が(歌)なり。世の中はいづれかさしてわが(宿)ならむ、行きとまるをぞ宿と定むる。

君の筆は僕の(筆)よりもよい。僕はボールをなくしたから、佐藤の(ボール)を借りた。

以上は文の成分(稀に其の一部)の省略される主な場合を挙げたのですが、其の他一般に意味の明瞭を損じない限に於ては、之を省略することが出来るのです。左に尙一二の例を出して見ませう。

廣瀬中佐の乗れる福井丸は今旅順の港口に進みたり。爆發の聲忽ち船底に響く。中佐は靜かに、杉野は今點火を終へたるぞ。總員ボートへ(乗り移レ)。(ト云フ)。ボートはやがて(人々ニ)福井丸の傍に卸されて、一同(コレニ)乗り移れり。見渡せば杉野なし。中佐は心配け

に「よし、(我ハ)杉野ヲ尋ね來む。」と(イヒテ)唯一人隈なく船内を尋ねたれども杉野の姿なし。「残念なり今一度(我)杉野ヲ(尋ね來ム)。」と(イヒテ)中佐は又も船内を駆け廻れり。「杉野、々々。」中佐の鋭き聲は敵の撃ち出す中に聞ゆ。されど杉野は見當らず。「今一度(我ハ)杉野ヲ(尋ね來ム)。」と中佐は三度杉野ヲ尋ね廻れり。「杉野、々々。」船は次第に沈み行きて、水は既に甲板を浸せり。

✓今既に二番船が出ようといふ所へ、至つて輕裝な年若の侍が僅かの荷物を左の手に提げて、船場の方へ参ります。船頭、お客さん(アナタニ)お乗りなさるのか。侍、おう(ワタシハ)乗船をしたい。船頭、では私ハ(アナタニ)船賃を戴きます。(アナタハ)お武家だに依つて、(私ハ)アナタニ(二人前を)戴キマス。侍、どう云ふ譯で(オ前ハ)武家に限つて二人前を(取ルノダ)。船頭、お武家様と云ふものは、お手荷物がありますのに、大小と云ふものが幅を取つて、場所が塞がりますから、(私ハ)オ武家ニハ(二人前ヲ)戴クノデス。」

斯の如く文の成分の省略は文意の明瞭を損じない限に於て之を行ふこ

とが出來ますけれども、固より便宜に屬する事で、當然の語法だと申すことが出來ないのであります。即ち我々は成分の省略された文に遭遇致しますると、殆んど無意識に其の省略された成分を填補して了解するのであります。省略された成分は何所までも省略されたのであつて、始めから無いものでないと云ふことは我々の深い注意を要する所であるのであります。